

『新しい学習評価への取組み』（2）

—新しい学習評価と授業の工夫改善—

全国中学校地理教育研究会名誉会長（元教育課程審議会委員）

佐野金吾

1 目標と指導と評価の一体化を目指す

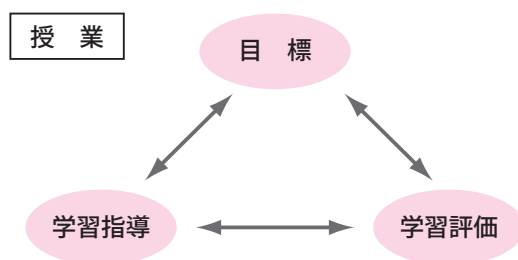
「新しい学習評価への取組み」には中学校学習指導要領の総則の第1に示す学力観、学習指導観についての的確に理解し、その趣旨にそった授業を展開することが必要です。教科書の記述内容を解説するといった授業では「新しい学習評価への取組み」は難しいでしょうし、授業が変わらなければ学習評価を改めることはできません。

学習評価のねらいは指導要録の改善の通知で示しているように学習評価を単に成績処理として行うのではなく、学習指導の在り方を見直したり個に応じた指導の充実を図ったりするために行うものです。まず学習評価に対する教師の立ち位置を改めることが肝心です。

学習評価のねらいにそった授業とするためには教科や分野の目標を実現できる学習指導を行い、学習の過程や学習の一定のまとまりの時点で目標の実現状況をとらえる学習評価を取り入れることが必要です。このような取組みは“目標と指導と評価の一体化”として学習評価の改善に向けて、たびたび指摘されてきました。また、このたびの指導要録の改善によって学習評価の4観点を「学力の3要素」と対応させるよう改めましたので指導と評価の結び付きは一層容易となっています。なお、学習評価についての具体的な取組みについては次回に取り上げます。

授業では分野や単元の目標を実現するため

に指導計画を立て、指導計画にそって1単位時間の目標を設定し、目標を実現するために必要とする教材を整えて学習指導に取組みます。形成的評価や生徒の自己評価などを学習指導の過程で適宜取り入れ、生徒の学習状況を把握し、状況に応じて学習指導の軌道修正を図りながら展開していくことになります。つまり学習指導と学習評価はコインの表・裏の関係として相互に密接にかかわることが重要です。こうした取組みを一般的には“目標と指導と評価の一体化”と表現していますが、このことを図で表すと、



となります。

この図からも分かるように授業は目標→指導→学習評価といった直線的な流れではなく、目標と学習指導と学習評価が常に強く関連しあった活動で、教師には生徒の学習状況を見極めながら目標を実現するために学習指導を常に工夫改善していく態度が必要となります。

授業は学習指導要領に示す教科の目標を実現するために行い、学習評価はその実現の状況をとらえることですから、教科や分野の目標を十分に理解していなければなりません。

中学校学習指導要領の第2章、第2節社会の

「第1 目標」には中学校3年間の社会科の授業で育む教科の目標を示し、「第2 各分野の目標及び内容」で地・歴・公の各分野の「目標」と「内容」及び「内容の取扱い」を示しています。授業を行うにも学習評価を行うにしても十分な読み込みが必要です。

各分野の目標はそれぞれ4つの項立てとなっており、(1)は分野の基本的な目標を示し、(2)と(3)は学習内容と身に付けるべき見方や考え方、(4)は分野の学習で育む能力・態度を示しています。各分野の目標・内容についての理解は授業の組み立てや学習評価を適切に行う上で何よりも重要です。

2 地理的分野の授業への取組み

(1) 地理的分野の目標と内容

地理的分野の目標の(1)には、我が国の国土と世界の諸地域に関する「地理的認識を養う」とあり、この目標を実現するために(2)では、地理的事象を位置や空間的な広がりでとらえることを目標としています。地理の学習では“どこに”、“何が”、“どのように分布しているか”、“それはどのような条件によるものなのか”といった空間認識に結び付く地理的な見方・考え方を養うことを目標としています。さらに地理的認識として様々な地域のとらえ方を身に付けることが重要ですが、このことを(3)で示しています。地理的認識とは(2)と(3)の目標を実現することによって育まれる資質・能力と言えます。(4)は地理的分野の学習で身に付けるべき能力や技能についての指摘です。なお地理的認識を養うには生徒の主体的な学習活動を必要としますが、このことは目標の記述内容から読み取れます。教師が教科書を解説したり、知識を一方的に教え込んだりする授業では地理的分野の目標を実現することは困難です。

学習指導要領では地理的分野の目標を実現するために学習内容は「(1)世界の様々な地域」と「(2)日本の様々な地域」の二つの大項目で構成していますが、この二つの大項目については「3内容の取扱い」で学習の順序を定めています。(1)の学習を基礎として(2)の学習が成り立つ仕組みで、(1)の学習で身に付けた地図や地球儀の扱いに関する技能、資料の活用、地域的特色のとらえ方、地域的特色をまとめて表現する能力などを(2)の学習で活用することで地理的認識が養われることになります。

(2) 授業の組立と学習評価

①『社会科 中学生の地理』「第1部2章 世界各地の人々の生活と環境」(p.16~41)

この章は大項目「(1)世界の様々な地域」の中項目の「イ 世界各地の人々の生活と環境」に示す目標・内容によって構成されています。この中項目では世界各地の人々の生活の様子を取り上げ、それぞれの地域の生活の特色を自然環境や社会環境とのかかわりから理解させることを目標としています。環境と人間の生活とのかかわりを考察する学習は地理の基礎・基本です。例えば、1節(p.16~17)には地図と多くの写真がありますが、この中項目の目標を実現するためには生徒が写真から地理的事象を読み取る学習活動が重要です。この中項目の学習では「1章 世界の姿」の学習で身に付けた地図の見方を活用して教科書で取り上げている地域の位置を確かめます。位置をとらえることは地理の学習では基本中の基本です。授業では地球儀と地図帳、掛け地図などを使って生徒が該当する位置を指摘したり、相対的な位置関係を生徒の言葉で表現したり、世界の略地図を書かせたりする学習活動となります。この学習での学習評価の観点は「資料活用能力」です。次

に写真から様々な地理的事象を読み取り地域の特色を指摘し、環境とのかかわりを考察して表現する学習活動が行われます。このような学習活動によってこの中項目の目標は実現できますし「資料活用の技能」（以下、技能）、「社会的事象についての知識・理解」（以下、知識・理解）、「社会的な思考・判断・表現」（以下、思考・判断・表現）の3観点を評価することができます。なお「社会的事象への関心・意欲・態度」（以下、関心・意欲・態度）の観点については時間をかけて生徒の学習状況を観察することが必要ですので、この節の学習だけで評価することは難しいでしょう。

②「第2部3章 日本の諸地域」(教科書p.164～259)

大項目「(2)日本の様々な地域」の中項目「ウ日本の諸地域」に該当する内容で地理的分野の要となる学習です。この中項目のねらいは、日本を幾つかに区分して(ア)～(キ)で示した考察の仕方によって各地域の地域的特色をとらえさせることです。なお“とらえる”とは“調べ追究して明らかにし、理解する”ことで、生徒の主体的な学習活動が期待されています。

3章は2学年の学習ですから、1学年で身に付けている地図の見方や使い方、略地図の描き方、地図帳の活用の仕方、写真や統計資料の見方や扱い方、さらに様々な資料から適切に選び読み取ったことを表現する力、生徒が興味関心を持ったことを自ら考察する力などを身に付けていますので、それらの能力を活用した学習活動が行われることになります。

例えば、「1節 九州地方」(p.166～177)では、“自然環境の視点を中心として”九州地方の地域的特色をとらえることをねらいとした学習内容です。この節のねらいは自然環境と人々の生活とのかかわりから地域の特色を追究しようとする学習活動によって達成で

きます。教科書の記述内容を解説する授業は避けてください。生徒の主体的な学習活動が行われないとねらいを実現することも適切な学習評価もできません。まず教科書p.166～167では地図や写真、統計資料の読み込みから九州地方の自然の特色をとらえ、言葉や地図で表現させます。『中学校社会科地図』p.71～73で九州の位置、p.81で山地や火山のようす、教科書p.167の雨温図で気候の特色を調べ、読み取ったことを発表させ、発表についての話し合い活動を行います。この時間は作業を伴う学習活動が中心ですから「技能」、「知識・理解」とともに話し合いや作業、発表の様子を観察することによって「思考・判断・表現」や「関心・意欲・態度」の評価も可能です。気のついたことをメモしておきましょう。教科書では「2火山のめぐみと防災への取り組み」、「3九州地方の都市や工業と自然環境」、「4自然環境と農業のくふう」、「5沖縄の自然環境とくらしや産業」と自然条件を基にして人々の生活や産業の特色を扱っていますが、地図や写真、統計資料などによって考察させる学習が重要です。最後に1～5の学習で習得した知識・技能を活用して九州地方の地域的特色を“まとめて表現”させますが、この中項目の目標を実現するためには“まとめて表現”する学習活動は必須です。まとめの作業の様子を観察したり出来上がった作品を鑑賞したりすることによって4観点の学習評価はできます。

3 歴史的分野の授業への取組み

歴史的分野では教師が教科書の記述内容を説明する授業が伝統的に行われていますが、このような授業では目標を実現することは難しいし、適切な学習評価もできません。

歴史的分野の目標(1)には「我が国の歴

史の大きな流れ」を理解することを目標とし、これまでの同列の関係で示されていた「各時代の特色」は「我が国の歴史の大きな流れ」を理解するために必要とする学習内容として扱うように改めています。基礎的・基本的な知識・概念の習得を重視したものです。目標の(2)、(3)は(1)の目標を実現するために必要とする学習内容で、(4)は歴史の学習で身に付ける能力に関する目標を示しています。基礎的・基本的な知識・概念を習得するためには「考察する力」、「表現する力」の育成を重視することは地理と同じです。

「目標と指導と評価の一体化」を図る歴史の授業とするためには、大項目(1)～(6)のアイなどの中項目の読み込みが重要です。例えば大項目(2)の中項目イでは「①律令国家の確立に至るまでの過程、②摂関政治などを通して、～③国家の仕組みが整えられ～④天皇や貴族の政治が展開したことを理解させる。」とありますように、この中項目の目標を実現する上で必要とする①～③の事項をしっかりと理解させた上で、①～③の事項を総合的に考察させ、④に示す時代の特色をとらえる学習活動ができる構成となっています。『社会科 中学生の歴史』p.28～41の記述内容と照合してみましょう。中項目に示す目標を構造的にとらえ、教科書の記述内容にそって教材研究し、生徒の主体的な学習活動を取り入れた授業を組み立てれば、目標を実現し、適切な学習評価も行うことができます。

なお今回の学習指導要領の改訂では歴史について考察する力や説明する力の育成、時代の区分やその移り変わりに気付く学習を重視しています。そこで教科書の「タイムトラベル」の活用を工夫してみましょう。例えば「タイムトラベル」を大項目の導入部とまとめの学習で活用します。導入部では、その時代の

特色を図から想定したことをメモさせ、その時代に対する興味・関心を持たせます。まとめの学習では授業で習得した知識・概念を活用して再度図版を見直し、時代の特色を適切に示している事象を取りあげ文章でまとめる表現活動を取り入れた学習活動とします。

4 公民的分野の授業への取組み

公民的分野も教科書の記述内容を解説している授業がよく見られますが、これでは目標の実現も適切な学習評価もできません。

公民的分野の授業は公民の基本的な目標の実現とともに中学校社会科の目標である“公民的資質の基礎を養う”上で重要な役割を担っています。公民的資質を養うためには生徒の主体的な学習活動が必須で、この点については分野の目標や内容から十分に読み取ってください。

『社会科 中学生の公民』の本文の記述は単に概念や制度の解説だけではなく生徒に考えさせる記述が随所にありますし、コラムや図版も“対立と合意”、“効率と公正”によって考察する場面を扱っています。

各中項目の目標を実現できる授業の組立とすることが適切な学習評価とするために必須となりますので中項目に示す目標が教科書ではどのような記述となっているか十分な読み込みが必要です。授業では習得した知識を活用して社会的事象を考察し、考察に基づく意見を表現させる学習活動を取り入れることによって“目標と指導と評価の一体化”を図ることができます。このような授業では、課題の投げかけや発問の内容・方法が重要で、目標に照らした課題や発問の工夫・開発が必要となります。なお、第5部は中学校社会科の集大成の学習となりますので学習指導の一層の工夫改善が必要です。